

國學院大學 研究開発推進機構 機構ニュース

Vol.19 No.1

発行人 笹生 衛
編集人 渡邊 卓〒150-8440 東京都渋谷区東
4丁目10番28号

電話 (03) 5466-0104

FAX (03) 5466-9237

事業

「カミ学」研究拠点の構築

笹生 衛・武田幸也

一、概要

國學院大學研究開発推進機構では、令和4(2022)年度より研究開発推進センターの研究事業として、「神道・日本文化の先端的研究」を開始した。その後、当該事業を推進する過程で、既存の神道学の課題を検討し、より広範な視点から神道と日本文化について研究する必要を確認した。

そもそも本機構は、神道・国学研究の推進および国際交流や研究成果の公開発信事業を担う「日本文化研究所」、考古学・神道の両資料館を統合した「学術資料センター」、本学の校史や本学が有する学術資産に基づいた研究を行う「校史・学術資産研究センター」という3つの本学共同利用研究機関と、建学の精神に基づく研究推進のための企画・立案や外部資金の獲得・運営を行う「研究開発推進センター」、学術研究の成果の公開・発信を行う「國學院大學博物館」により構成されている。本研究プロジェクトは、先述の課題を克服していくため、こ

れらの機関が展開する各事業をより一層有機的に結びつけ、学外の研究者とも協働した研究プロジェクトを立ち上げることを目的に構想されたものである。

こうした状況をふまえ、本機構では学長の指示のもと、令和5(2023)年度より大型の共同研究推進プロジェクトの創設に着手し、全学部参加型の大型研究プロジェクトとして「カミ学」を構想した。本研究プロジェクトでは、固定的な概念として理解されがちな「神」を、日本の多面的な「神」概念を手がかりに、神をヒトと世界とを媒介する新たな動的概念「カミ」として再定義し、既存の宗教という枠組よりも広範かつ通文化的な視点から、分野越境的な研究と人文学の社会還元による課題解決的な研究の推進を試みる。

なお、本研究プロジェクトは令和6(2024)年度の後期から具体的な運営が開始され、本年度から正式な研究開発推進機構全体のプロジェクトとして位置付けられた。

事業

「カミ学」研究拠点の構築

令和6年度研究事業成果報告

日本文化研究所「宗教文化研究と学術情報発信の推進」

学術資料センター(考古学資料館部門)事業

学術資料センター(神道資料館部門)事業

校史・学術資産研究センター事業

研究開発推進センター研究事業「神道・日本文化の先端的研究」

宮本誉士・新井大祐・木村大樹…7

研究開発推進センター「SDGs」と建学の精神」研究事業

研究開発推進センター 國學院大學「古典文化学」の創出研究事業

國學院大學博物館事業

事業連携

三嶋大社の東京出張―博物館と共催―

調査研究

伝仁徳陵古墳の出土品―共同研究はじまる―

集報

人事一覧

往還

目次

笹生 衛・武田幸也…1

星野靖二…3

深澤太郎…4

大東敬明…5

渡邊 卓…6

宮本誉士…7

渡邊 卓…9

高橋あかね・尾上周平…10

深澤太郎・吉永博彰…12

内川隆志・深澤太郎…12

吉澤 徹…16

二、全体会議・公開研究会

令和6年度は、「カミ学」に参画する全ての研究者間の情報共有と学術交流を目的として全体会議を行うことで、プロジェクト全体の方針について議論を深めていった。また、参画研究者を招待して公開研究会を開催することで、関連する学問領域についての最新の研究成果や研究動向を学内外に広く発信した。

①全体会議

令和6年度は、プロジェクト参画者による全体会議を2回開催した。

【第1回全体会議】

開催日…令和6年9月21日(土)

会場…國學院大學 渋谷キャンパス5号館3階5302教室(対面・オンライン併用)

【第2回全体会議】

開催日…令和7年2月15日(土)

会場…國學院大學 渋谷キャンパス5号館3階5301教室(対面・オンライン併用)

各会議では、「カミ学」研究プロジェクト全体の概要の説明や、「カミ学」内における各研究班の内容・構成員、また本機構による「カミ学」へのかかり方の詳細について、参画研究者と共有がなされた。



第1回全体会議
令和6年9月21日（土）

②公開研究会

令和6年度は、公開研究会を2回開催した。なお、関連して、月1回程度のペースで内部研究も開催している。

【第1回公開研究会】

開催日…令和7年2月15日（土）

会場…國學院大學 渋谷キャンパス5号館3階5301教室（対面・オンライン併用）

（発題）

・笹生衛「日本文化の形成と宗教—文化進化論の視点からの再検討（試論）」

（コメント）

・後藤明（南山大学人類学研究所特任研究員）

・中田星矢（東京大学国際高等研究所特任研究員）

本研究会では笹生機構長により、近年の文化進化論の成果が紹介されたうえ

で、8世紀から12世紀の日本の東国を対象とした文化形成過程が検討され、古代日本における文化進化の要素として、世界宗教（仏教）と国家の関係性の構築、社会不安と個人救済欲求の増加、既存の社会集団の流動化と氏族集団の解体・再編が挙げられると報告された。この報告に対し、後藤氏は人類学の立場から、オーストロネシア語族における社会の発展に宗教が大きく寄与していたことを紹介し、また中田氏は心理学の立場から、文化・社会・心理の歴史を紐解くことで現代社会に見られる文化的・社会的・心理的な多様性を理解することができ、それにより多様な社会の未来を予測できる可能性もあることを指摘した。

【第2回公開研究会】「木村正辞と万葉集研究」

開催日…令和7年2月16日（日）

会場…國學院大學 渋谷キャンパス5号館3階5301教室（対面・オンライン併用）

（発題）

・大沼宜規（共同研究員・国立国会図書館司書）「木村正辞の活動とその基盤—主として幕末期に着目して—」

・大谷歩（共同研究員・天理大学講師）

「木村正辞の万葉学—「三辨證」の形成と『万葉集美夫君志』への展開をめぐって—」

大沼氏は、木村正辞の幕末期から明治後期までの活動の特徴について検討し、幕末期から『万葉集』を中心に広く善本や校本を重視して収集するとともに、蔵書の共有を進め、その活動は近代の人文学の基盤になっていると論じた。また大

谷氏は、木村正辞の著作の成立過程を検討し、明確な根拠資料に基づいた先行研究の検証や、古写本の文字・訓読を評価しようとする論証方法を確立させたことが大きな功績として挙げられると指摘した。

なお、令和7（2025）年度も既に公開研究会を開催している。

【公開研究会】「神社史料の保存と継承、神社史料情報の学術還元」

開催日…令和7年5月18日（日）

会場…國學院大學 渋谷キャンパスAMC棟5階会議室06（対面・オンライン併用）

（基調報告）

・大藪海（お茶の水女子大学准教授）「中世神社史料研究の現状と課題」

（報告）

・比企貴之（國學院大學助教）「近代史学史と石清水八幡宮の史料群」

・野村朋弘（京都芸術大学教授）「松尾大社史料の伝来と保存」

・遠藤基郎（東京大学教授）「蓄積・共有発信型実務担当の経験から—データベース・レポジトリの利用—」

大藪氏は、神社史料の公開の実態、また神社史料研究の現状について報告し、個々の神社について史料の調査・研究を進めるとともに、神社相互の史料を比較・検討する視点が必要であると指摘した。比企氏は、近代において石清水八幡宮では常に歴史学者による調査や史料集編纂、散佚に備えた目録の整備が行われていたとして、史料の継承における神社と学術界の相互理解の必要性を指摘した。野村氏は、松尾大社の所蔵史料の概

要やその継承に関する現況について解説し、史料の来歴の把握や維持・管理を神職の側で十全に行える体制を整え、その重要性を氏子に伝えていくべきことが課題として取り上げられた。最後に遠藤氏は、これまでで自身が参画されたプロジェクトを中心とした、史料のデータベースやレポジトリの運用事例を紹介し、これらの永続的な維持にあたっては、自前のコンテンツだけでなく他機関の公開コンテンツの活用も視野に入れるべきであることや、「寺院史料論」に倣い、経営や祭式など様々な性質の神社史料を総合的に把握し、それを神社の日常的活動やイベントと結びつけて活用する「神社史料論」を構築するという選択肢もあることが示された。

これら全体会議や公開研究会については今後も継続的に実施し、本機構の研究活動のさらなる発展を図る。



公開研究会（全体討議）
令和7年5月18日（日）

令和6年度研究事業成果報告 日本文化研究所

宗教文化研究と学術情報発信の推進

星野靖 二

一、研究事業の概要

本事業は、本学のこれまでの研究蓄積を発展的に継承する形で、日本の宗教文化に関する研究を更に展開させていく。また、その成果である学術情報を、英語・多言語化に可能な限りに対応させながら、国内外に発信していく。「宗教文化研究」について、神道・国学に加えて、広く宗教文化についての研究を推進していく。具体的には以下のような事業を行う。

(1) 宗教文化研究

① 研究成果のアーカイブ化…これまで蓄積された学術情報をアーカイブ化し、公開を進めると同時に、その内容と意義について、あらためて検討する。旧日本文化研究所の刊行物について、適宜的に著作権処理を行い、リポジトリ登録作業を行う。旧日本文化研究所所蔵資料の整理を進める。

② 宗教文化研究の推進…近代の宗教メディアに関して、本学所蔵の近現代の神道・国学、日本宗教関係の雑誌についてリスト化、概要調査を行い、これらについて研究を行う。死生観・靈魂観の問題について、他機関との連携の可能性を探りつつ、多角的な視点から研究を推進していく。研究成果について、より公益に資することを念頭に置いて、宗教文化教育の教材開発へと展開させ、その成果をウェブ上で公開する。

(2) 学術情報発信

① ウェブ上での学術情報の発信…本学諸機関と連携しながらデジタル・ミュージアムの運営に関わり、学術情報を国際的に発信するため、特に Encyclopedia of Shinto 等、デジタル・ミュージアム上で公開している英語の学術情報を拡充する。Shinto Portal サイトを運用して、神道についての信頼に足る英語の情報を集約して国内外の研究者と共有する。オンライン英文ジャーナルである *Kokugakuin Japan Studies* を刊行し、本学専任教員による論文を英訳して掲載し、国際的な成果発信を行う。ウェブサイト、SNS 等、各種媒体を活用して、学術情報を発信していく。

② 国内外の研究者・研究機関との交流・連携…公開の研究会を開催し、学術情報を広く社会に発信しながら、国内外の研究者との交流を深める。英語圏における日本の宗教文化研究の動向を調査し、主要な研究者・機関について情報を集積してリスト化する。国際研究フォーラム等の主催催事への国内外研究者の招聘、また国際学会への参加・発表等を通して、国際的な研究交流を行う。

二、令和6年度の研究事業成果

(1) ① 研究成果のアーカイブ化

21世紀COEプログラムと旧日本文化研究所の成果を中心にデジタル化、整理を進めた。電子化の済んでいないマイクロフィルム(白山比咩神社文書、大山祇神社文書、他)について、六十九巻分の電子化を行った。旧日本文化研究所草創期に開催されていた研究会「盲点の会」「現代神道研究会」について調査を進めた。デジタル化済の柳田國男講義テープのうち、重要度の高い講義テープの翻刻を行っている。本学図書館に収蔵されている近代宗教雑誌の調査について、近代神道雑誌の一覧化を進めた。また、仏教関連の雑誌について、『中央仏教』の目次作成を進めた。引き続き旧日本文化研究所の『紀要』『所報』の目次情報の更新作業を行っており、執筆者の一覧リストについて、確認、情報追加を進めた。

(1) ② 宗教文化研究の推進

特に三宅島をフィールドとして、靈魂観と死生観についての調査・研究を進め、日本文化研究所が共催した「宗教と社会」学会の学術大会で、テーマセッション「人の移動と葬送文化の継承・再編—三宅島の葬儀の担い手と芸能の伝承者に着目して—」を行った(代表者:川嶋麗華。報告者:大場あや(PD研究員)、川嶋麗華、柳原友子、高田彩(客員研究員)。コメント:テーター:問芝志保(共同研究員)、伊藤純)。その成果を「特集」としてまとめ、「年報」17号に掲載した。

(2) ① ウェブ上での学術情報の発信

Encyclopedia of Shinto や Basic Terms of Shinto などのデータベース、またポータルサイトである Shinto Portal について、情報の更新などを行って運用した。研究所のウェブサイト、各種 SNS を通じて

情報発信を行った。*Kokugakuin Japan Studies* 第6号において、本学教員の研究論文を3本英訳して刊行した。

(2) ② 国内外の研究者・研究機関との交流・連携

国際学会を1回、学会を1回、研究会などの催事を5回共催し、国内外の研究者との交流を深めた。昨年度開催した国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか—ツーリズムと宗教文化」の報告書を刊行した。

令和6(2024)年度の国際研究フォーラムとして、12月15日に「つむがれる宗教文化…生み出されるカタリとカタチ」を開催した(報告者:題目:ケイトリン・ユゴレッツ(南山大学助教)「現代神道のグローバル化をめぐる諸相」、君島彩子(和光大学講師)「平成時代の仏像と信仰」、オリオン・クラウタウ(東北大学准教授)「和国教主とその教訓…聖徳太子と憲法の近代」。コメント:平藤喜久子、細田あや子(新潟大学教授)。

日本文化研究所研究会を2回開催した(第1回「宗教とビジネスの関わりの様相」、報告者:題目:藤井修平(PD研究員)「ビジネスと宗教…宗教的身体技法の応用に着目して」、武井謙悟(PD研究員)「宗教と大学と企業…修養団体「よるこび会」に着目して」、コメント:大澤純子(東北大学助教)。3月24日、オンライン開催。第2回、報告者:木村悠之介(PD研究員)、題目:「久米邦武の近代と佐賀藩人脈」、コメント:三ツ松誠(共同研究員、佐賀大学准教授)。3月28日、ハイブリッド開催。

令和6年度研究事業成果報告 学術資料センター考古学資料館部門

学術資料センター（考古学資料館部門）事業

深澤 太郎

一、研究事業の概要

日本文化の形成過程と、その普遍性・特殊性を明らかにするための事業を推進し、博物館における展示・出版・デジタルミュージアム等を通して研究成果を公開する。

（一）考古・民俗資料の収集と調査研究

旧考古学資料館から継続してきた考古・民俗資料の収集・整理保管と、調査研究機能を担う。また、収蔵資料の再整理を進めつつ、『収蔵品目録』の整備を図る。

（二）歴史資料の収集と調査研究

旧伝統文化リサーチセンター後継事業であり、歴史資料の収集・整理保管と、調査研究機能を担う。特に、考古学・民俗学関係アーカイブの資料化を推進する。

（三）学術資料のデジタル化と公開

旧日本文化研究所学術フロントニア後継事業であり、事業1・2にて再整理した資料と、事業2にて取り扱っている劣化画像の再生活用、および公開を実施する。

（四）祭祀遺跡・祭祀祭礼等の調査研究

事業1・3と協働しつつ、本学関係者が調査してきた考古学的遺跡や、祭祀祭礼等の民俗記録を再検討するため、現地関係機関等と連携した調査研究を行う。

（五）学芸職実践教育

以上の事業に研究員等・臨時雇員を参画させ、次世代の学芸研究職員の育成を目指す。

二、令和6年度の研究事業成果

（一）考古・民俗資料の収集と調査研究
計画的に資料の収集・整理を進め、昭和3（1928）年の考古学標本室創立時から運用してきた『列品台帳』をもとに、『収蔵品総目録』を整備している。

当年度は、奈良県天理市龍王山古墳群出土資料、静岡県浜松市瓢箪塚古墳出土資料の再整理成果も公表した。たまプラーザキャンパスの民俗資料仮倉庫で管理している民具については、今年度より専用ガスの販売中止に伴い燻蒸が困難になるため、主にメタデータの判明している福島県・神奈川県等の資料を選定して渋谷キャンパスへ移送し、燻蒸を行って収蔵庫に収めた。新たな収集資料としては、後頁でも紹介する大阪府堺市大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）出土遺物を含む柏木貨一郎旧蔵資料一括がある。

また、今後の解体修理も見据えている山梨県笛吹市井之上古墳出土陶棺の彩色顔料については、奥山誠義氏・絹田歩氏・河崎衣美氏と日本文化財科学会第41回大会（7月27日）にて発表。茨城県大洗町日下ヶ塚古墳（鏡塚古墳・常陸鏡塚）の研究に関しては、大洗町教育委員会主催の考古学シンポジウム「ヤマト王権と磯浜古墳群」（12月8日）にて成果を発表した。

（二）歴史資料の収集と調査研究

「柴田常恵野帳資料」のうち、「考古書留

の一部につき翻刻を公開した。また、少年時代の大場磐雄が編んだ同人考古学雑誌『いそのかみ』は、大正期の考古学界を知る有益な資料であり、茂木雅博客員教授・茨城大学名誉教授監修のもとで翻刻・刊行した（ニュース前号に関連記事あり）。

一方、『漢代物質文化資料図説』の翻訳刊行は、監修を依頼していた朱岩石客員教授・社会科学学院考古研究所研究員が急逝されたため進捗が遅れが生じている。

（三）学術資料のデジタル化と公開

國學院大學博物館収蔵資料総目録（考古）「社寺等絵葉書資料」に加え、研究者個人資料のデータベース化を進めてきた。令和6年度は、昨年度整理が完了していた「社寺等絵葉書資料」16,096点をデジタルミュージアムにおいて公開した。

考古学分野の「大場磐雄写真資料」の35mmフィルムについては、4,277点の再整理を進めている。なお、「國學院大學博物館収蔵資料総目録（考古）」については、令和7（2025）年度までに目録を順次公開し、同8（2026）年度の完成を期したい。

（四）祭祀遺跡・祭礼等の調査研究

神道資料館部門と共同して、大学本体と（一社）美しい伊豆創造センターとの間で締結された連携協定関連事業、及び当センターが実施してきた「伊豆地域の宗教考古学的研究」事業を推進。伊豆半島・伊豆諸島の関連資料を調査し、併せて三島市立図書館（6月16日）・三宅島郷土資料館（11月4日）・美しい伊豆創造センターでの講演会（11月23日）に登壇した。さらに、テレビ（深澤太郎・吉永博

彰「TimeTrip—伊豆半島ジオパーク伊豆諸島を渡った人類と神々—」、12月21日、BSフジ）等を介しての事業成果紹介も行った。

「神社境内祭祀遺跡の研究」事業では、福島県白河市教育委員会と共同で実施した建鉾山祭祀遺跡（高木地区）の3次元測量成果を報告した（ニュース前号に関連記事あり）。目下、同遺跡の史跡整備も視野に入れ、白河市との研究協定締結に向けた協議を進めているところである。

（五）学芸職実践教育

当センターに所属した研究員等・臨時雇員のうち、大学院を修了した考古班5名が、鳥取県教育委員会・新潟県教育委員会・藤沢市教育委員会・宜野湾市教育委員会・杉戸町教育委員会に採用された。事業推進に伴う実践的な教育効果を果たし得たものと考えている。

三、博物館における成果公開

特別展としては、文永の役から750年目を迎えたモンゴル襲来に関する研究成果を公開する「海底に眠るモンゴル襲来—水中考古学の世界—」（絵詞に探るモンゴル襲来—「蒙古襲来絵詞」の世界—）を池田榮史が担当。その他、当部門が担当した特集展示には、吉田恵二没後10年を記念した「穂高古墳群 F9号墳—築造・廃絶、そして再利用—」、Bunkamura主催の「洪アト&ウォーク」と連携した「伊豆の温泉と修験道」、アジア鑄造技術史学会の開催に伴う「科学分析データ—見える青銅器—館蔵資料の最新研究—」（ニュース前号に関連記事あり）、「ハニワ—その調査と修理—」、「パレスチナ—その文化と文学—」がある。

令和6年度研究事業成果報告 学術資料センター神道資料館部門

学術資料センター (神道資料館部門) 事業

大 東 敬 明

一、研究事業の概要

学術資料センター (神道資料館部門) 事業は、同部門が所管する学術資料の整理・保存・研究をすすめる、研究・教育に活用できる体制を整えること、あわせて本学が所蔵する神道に関わる資料及び神道史の研究を進めることを目的とする。

この成果は、國學院大學博物館における展示や、本部門の刊行物のほか、國學院大學博物館 Online Museum などを通して公開する。

(1) 所管資料の整理・保存・研究

本部門が所管してきた資料の整理・保存・研究を継続するとともに、本学が所蔵する宮地直一・西田長男両博士旧蔵資料をはじめとする諸資料群の整理・調査を行い、研究・教育・展示などに適切に対応できる体制を整える。

(2) 神道史研究の推進

(1) で得られた情報をもとに、本学の学術資料を活用しつつ、神社史、祭祀・祭礼史を中心に神道史を再検討し、さらに学内外における教育・普及事業へと反映させる。

(3) 研究成果の公開

(1) (2) で得られた成果は、本部門の刊行物、國學院大學博物館における常設展・特別展・企画展・特集展示、國學院大學博物館 Online Museum におけるYouTube番組などにより公開する。

二、令和6年度の研究事業成果

(1) 所管資料の整理・研究・分析・保存

学術資料センター (神道資料館部門) では、所管資料の調査・研究分析・保存を進めている。令和6年度は、宮地直一博士旧蔵資料の掛幅を含めた絵画を中心に実施した。

西田長男博士旧蔵資料については、「西田長男博士旧蔵資料―資料と研究―」(後期) で資料を公開した。また、調査の中で見出された『八幡愚童訓』(甲本) については、さらに調査を深め、特別展「文永の役750年 1122 絵詞に探るモンゴル襲来―『蒙古襲来絵詞』の世界―」において展示した。

令和6年秋より、月に一回程度、西田長男旧蔵資料ほか、本学が所蔵する中世神道関連資料について調査を進めている。この成果の一部は、令和7年秋に國學院大學博物館で行う企画展「中世日本の神々―物語・姿・秘説―」にて公開する予定である。

所管資料のうち、吉田家が発給した裁許状ほかについては、吉永博彰・大胡友暉「國學院大學博物館蔵「吉田家関係資料(神道裁許状ほか)」の紹介と解説」(『博物館研究報告』第41輯) で一覽を示し、またそれらが含まれる佐志八幡宮・宮崎家文書については翻刻や解題を掲載した。吉田家は、吉田神社(京都市)の神職を

務めた家で、古典や神祇に関わる故実の家としての地位を確立するとともに、江戸時代には神社神職に対して大きな影響力を持っていた。

(2) 神道史研究の推進

令和9年の『延喜式』撰上二一〇〇年に向け、古代の祭祀や神観念を中心に研究を進めている。これは、同年に本部門等の研究成果をふまえた展示を計画しているためである。その一環で、『延喜式』祭料の分析に向けた基礎作業を行った。

天皇祭祀・伊勢神宮・斎宮など天照大神への祭祀についての研究では、公開シンポジウム「古代伊勢斎宮の歴史とまつり」(共催: SDS 科 研 費 (課題番号 2322026)) 若手研究「古代天照大神祭祀の構造―伊勢神宮祭祀の実態を中心に―」(代表: 塩川 哲朗) を開催した。詳細は、本ニュース36号の報告を参照。

このほか、学外の研究者を交え、吉田家・吉田神道に関わる研究会を実施した。この成果は、令和8年度以降の國學院大學博物館での展示に反映する予定である。なお、同研究については、「学術資産を活用した吉田家・吉田神道研究への展望」(本ニュース36号) を参照。

(3) 研究成果の公開―博物館展示―

企画展

企画展「神興―つながる人と人―」(会期: 令和6年6月29日〜9月16日) では江戸・東京の祭礼に注目しながら、神興の展開を通史的に示した。これは、企画展「祭礼行列―渡る神と人―」(会期: 平成28年10月15日〜12月4日) 以来、進めてきた研究をまとめたものであり、人と神興、さらに地域との関わりを考えよう

としたものである。

特集展示

・「西田長男博士旧蔵資料―資料と研究―」後期(会期: 令和6年4月20日〜5月23日)

・「教派神道の祭祀と行」(会期: 令和6年5月28日〜6月23日、教派神道連合会共催)

・「吉田家の人々」(令和6年9月21日〜10月20日)

・「熊野へ―参詣と縁起―」(「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録20周年記念)(会期: 令和6年10月22日〜12月6日)

「吉田家の人々」では、國學院大學図書館・博物館に分蔵されている吉田家旧蔵の吉田家代々の肖像に加え、宮地直一・西田長男らの調査によつて撮影が行われた肖像画の写真(西田長男旧蔵) を展示した。なお、西田長男旧蔵の写真は、令和6年に、新たに寄贈されたものである。同肖像画は、西田長男「兼俱以下吉田家歴代の肖像画」(國學院大學神道史学会編『宮地直一博士三十年祭記念論文集 神道史の研究』叢文社、1980年) で紹介され、広く知られたものであり、展示した写真は、同論文で用いられたものである。同展示は、主に吉永博彰助教(当時) が担当した。

「熊野へ―参詣と縁起―」は國學院大學図書館所蔵「熊野那智参詣曼荼羅」をはじめ、『熊野の本地』(江戸時代前期)、『長寛勘文』(享保17年(1732) 写) などの熊野参詣に関わる資料を展示した。同展示は、高橋あかね研究補助員(当時) ほかを担当した。

令和6年度研究事業成果報告 校史・学術資産研究センター

校史・学術資産研究センター事業

渡 邊 卓

一、研究事業の概要

校史・学術資産研究センター（以下「本センター」）は、國學院大學の歴史および同大学が所蔵する学術資産の調査・研究・公開を担う組織として設置されている。

校史研究部門と学術資産研究部門との二部門によって構成され、各種の資料整理や目録化、調査・研究成果の発信を通じて、学内外における知的資源の共有と教育支援を進めてきた。本センターの事業は、単なる史資料の保全や公開にとどまらず、「建学の精神に基づく、日本を学ぶ体系的なカリキュラムや研究を推進する環境の整備」（國學院大學中期5ヵ年計画【戦略3】）を具現化する一環としても位置づけられている。

二、令和6年度の研究事業成果

本センターの令和6（2024）年度における事業では、令和5（2023）年度までの実績と課題とを踏まえつつ、組織規模に見合った計画的・持続的な運営が図られた。

（1）校史関係

校史研究部門においては、自校史教育の推進と将来的な大学史編纂を見据え、校史資料の精査と目録の充実が重要な課題とされた。とくに写真資料（鶏卵紙・ポジフィルム・ネガフィルム・マイクロフィルム）の保存状態の悪化に対応すべく、約1,000点のデジタル化を含む

資料保全が推進されたほか、保存処理を施した資料は約500点に及んだ。さらに、新たに1,547点の校史資料を目録に登録し、資料検索性の向上と管理体制の強化に寄与した。

また、学外所在の校史関係資料の調査・収集にも着手し、たとえば岐阜県歴史資料館が所蔵する皇典講究分所および地方神社行政関係の史料の調査を実施した。こうした取り組みは、明治期の本学の地方活動や当該地域における学問・信仰の拠点形成の過程と実態とを理解する上で、きわめて重要な手がかりとなった。

このように校史研究の成果は、教育現場への還元も視野に入れたものであり、学部における講義科目「國學院大學の歴史」（いわゆる「國學院科目」）のテキスト改訂にも結実している。また、学内研修への講師としての登壇や外部から寄せられる問い合わせへの対応などを通して、自校史教育の定着と拡充が着実に進められている。

（2）学術資産関係

一方、学術資産研究部門では、過年度に引き続き國學院大學図書館所蔵の貴重資料を中心とする史料群の調査・研究が進められた。なかでも神社史・神祇信仰史にかかわる研究の基幹史料となる『吉田家文書』にかんしては、その翻刻作業を進めるとともに、9次にわたる原本

調査を実施し、教育・研究への応用体制の構築に努めた。なお、こうした活動とも連動して、本学図書館のデジタルライブラリーの解題作成や画像公開も進展し、学術的知見の社会還元にも貢献している。

（3）資料の保存処理とデジタル保存

保存状態が悪化しつつあった資料のなかから、酢酸シンドロームが進行した写真資料などを選別し、緊急的なデジタル保存を行ったことは、保存科学的にも先進的かつ意義深い試みであった。こうした蓄積された成果は、将来的な展示や教育への活用が期待される。

（4）校史・学術資産研究の知見の社会還元

令和6年度はさらに、これまでの研究成果が外部においても高く評価される機会が多くあった。たとえば、令和6年9月に開催された山田顕義関連イベント「話と舞 君に捧げん鮎のうを 有栖川宮と山田顕義」（NPO法人 花の会主催）では、本センターの渡邊卓准教授が「有栖川宮 轍仁親王の御芳躰」と題する講演をおこない、岐阜・長良川を舞台に近代皇室と國學院との関係史を再検討する視座を提供した。講演は、長年にわたり推進されてきた自校史教育の厚みと展開を象徴するものとなった。

また、2024年度第56回日本古文書学会大会における國學院大學図書館所蔵中世・近世古文書の展示解説（担当・比企貴之助教）は、所蔵史料の学術的価値を広く社会に向けて可視化する好機となり、本センターが主導する「貴重資料の調査・研究」が学界的に認知される象徴的事例となった。

（5）機関刊行物による成果の公開・発信

研究成果の公開については、機関誌「校史・学術資産研究」第17号（令和7年3月刊行）で以下の論文を掲載した。

藤田大誠「近代国学と皇位継承儀礼―大正大札と皇典講究所・國學院大學関係者の活動を中心に―」

齊藤みのり「國學院大學と中等教員養成―昭和戦前期の活動を事例として―」
比企貴之「大中臣祭主の家にかんする研究余滴―名前の「親」字の読み―」

高見澤美紀「近世後期の乳人奉公人請状・里預証文にみる吉田家子女の養育慣行」

あわせて、野中哲照による翻刻資料紹介である「城一本『平家物語』巻十・十二」も掲載され、図書館資料の学術的な活用例として示された。このほかにも『校史』Vol.35を大学の歴史にかかわる記事で構成することとし、『國學院大學学報』[学問の道]シリーズでは、渡邊・比企両名が『國學院雑誌』創刊一三〇年を記念した連載を通年で展開し、國學院大學の出版文化史に新たな光を当てている。

以上のように、令和6年度の本センターの事業は、所期の計画に即した内容で着実に進捗し、その成果は教育・研究・社会連携の各分野において多面的に波及したと評価される。今後も校史および学術資産の体系的調査と研究を通じ、國學院大學の歴史的意義と知的財産とを継承・発展させる基盤の形成に尽力していきたい。

令和6年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

研究開発推進センター研究事業 「神道・日本文化の先端的研究」

一、研究事業の概要

本事業は、学校法人國學院大學中期5ヵ年計画に従い、これまで実践してきた本センターの研究事業をさらに発展させるべく、新たな国学的研究による拠点機能の拡充を目指したものである。院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄附金に基づく研究事業として実施し、次の①～⑥の事業を推進した。

①「神道・日本文化の先端的研究」推進のための学際的・国際的研究のハブとなる拠点構築

神道・日本文化研究を推進してきた研究機関・組織、及び機構内各機関との連携を図り、本学及び本機構が学際的・国際的研究のハブとなる拠点構築のため、研究交流を行う。

②近年の研究の概括と課題抽出

構成員及び機構教員の専門に応じて、近年の神道・日本文化に関する研究業績の統合・概括、論点や課題の抽出により、研究の基盤構築を行う。

③基礎資料の作成／④関係資料の調査・保存・活用

基礎資料の作成を行うとともに、本学図書館や機構が所蔵する神道・日本文化関係資料の調査、撮影・保存・活用を行う。

⑤研究開発推進センター研究会の企画・運営

センター研究会の企画・運営を中心に、

宮本誉士・新井大祐・木村大樹

若手を含めた多彩な研究者を招いた研究会を定期的に開催することにより、学会や学外研究機関などとの連携を行う。

⑥研究開発推進センター研究紀要等の刊行物による研究成果の社会的発信

『研究開発推進センター研究紀要』の編集・刊行作業を中心に成果公開を行う。

なお、本事業は、指定寄附金に基づく単年度事業であり、令和4年度からの5ヵ年計画として開始したが、令和7年度以降は、官公庁等による競争的外部資金の獲得に向けたマネジメント事業「カミ学」研究拠点の構築へ移行する。「カミ学」の構想に基づく全体会議・公開研究会等の実施状況については、本紙1～2頁を参照のこと。

二、令和6年度の研究事業成果

本事業の3年目にあたる令和6年度は、次に掲げる研究事業を主に実施した（該当する上記業務の番号を付した）。

（1）神社本庁総合研究所との連携による業務（①）

神社本庁総合研究所と連携し、『明治期神社法令史料集成（仮）』の基礎データ作成作業を継続して実施した（③）。また、研究協力に係る作業内容について、二度の協議を実施し、進捗状況の確認や成果物の公開方法（令和8年度の刊行を予定）の検討等を行った。なお、本作業には、主に神社本庁指定寄附金に

基づく臨時雇員が従事した。

（2）「近代神社社格昇格関係資料」の調査・活用（③④）

本学所蔵の「近代神社社格昇格関係資料」群について、制度運用の実態に関する分析を行うとともに、関連する神社本庁所蔵の神祇院関係資料の調査・撮影を実施した。また、これから得られた知見について、兼任教員や研究員が、センター研究会及び内部研究会（下記）で報告した（⑤）。

（3）センター研究会等の開催（⑤）

・ジョルダン・サンド氏（本機構特別招聘教授）と機構教員との交流・親睦のため、同氏著『破壊と再生の伊勢神宮』（令和5年、岩波書店）に関する質疑応答を中心とした意見交換会を開催（令和6年6月18日、対面、学術資料センター（神道資料館部門）との協同、①）。

・第1回センター研究会、藤田大誠氏（本センター兼任教員）＝「近代神社における社格制度の基礎的考察」（同年8月1日、対面、②④）。なお、関連する内部研究会として入倉混太氏（PD研究員）＝「本学所蔵資料「近代神社社格関係資料」について」を開催（同年5月16日、対面、③④）。

・第2回センター研究会、藤井哲彦氏（本学総合企画部企画担当次長）＝「ヨーロッパに鎮座する神社の現況」（同年12月20日、オンライン）。本報告の内容は『研究開発推進センター研究紀要』第19号に掲載した。

・第3回センター研究会、杉田建斗氏（東京大学大学院人文社会系研究科助教）

＝「御体御下と天皇親祭・官社制」（令和7年2月7日、ハイブリッド、①②）。

（4）定期刊行物の刊行（⑥）

『研究開発推進センター研究紀要』第19号を刊行し、構成員による論文5本をはじめ、研究会記録、公開講座記録、講義記録、研究会報告、彙報を収載した。

また、本紀要のバックナンバーについて、本学学術情報リポジトリ（K-RAIN）への登録にかかる作業を行った。現在、第1号（平成19年3月刊）から最新号までの計二〇〇本を超える所収論文等のうち、掲載許諾の採れたものから順次メタデータと本文PDFを公開済である。

（5）その他

第63回神宮式年遷宮の諸祭儀の本格的開始を目前に控え、最新研究の動向把握及び研究交流を目的として、皇學館大学研究開発推進センター神道研究所主催の合同研究会「天皇・神宮の祭り」と歴史に関する諸研究の現状と課題を共催した。「皇學館大学と國學院大學の教育・学術研究交流に関する協定」に基づき、本センターの教員2名（大東・木村）が参加し、報告及びコメント、意見交換等を行った（令和7年2月27日、対面、於皇學館大学、①②）。この内容は、『皇學館大学研究開発推進センター紀要』12号（令和7年度末刊行予定）に掲載予定である。

また、一般財団法人神道文化会会の公開講演会「平安時代と神道文化」（令和6年6月15日）、及び明治聖徳記念学会の公開シンポジウム「神社の信仰の今と昔―伊勢神宮を軸にして―」（同年7月13日）を、それぞれ共催した（①）。

令和6年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

「SDGs」と建学の精神」研究事業

宮本 誉士

一、研究事業の概要

本事業は、学校法人國學院大學中期5カ年計画に従い、「共生社会を創り出す人材の輩出」に研究面から寄与することを目指して、国連「SDGs（持続可能な開発目標）」を建学の精神から考察するとともに、「渋谷学」等の本学における様々な研究成果や取り組みも含めて、「SDGs」に関連づけて社会へ発信することを目的とする。また、本学の教育活動や社会貢献・地域連携へとそれらを展開させることで、その成果を社会へ還元するべく、以下の①～⑤の事業に取り組み計画である。

- ① 建学の精神から「SDGs」を考える理論的な研究を推進する。
- ② 学内における取り組みを集約するためのプラットフォーム（ワーキンググループ等を含む）構築を目指し、学内の連携を行う。
- ③ これまでの研究成果を再構築し、学外協定等を加味して、社会貢献・地域連携に積極的に活用する方途を模索する。
- ④ 「SDGs」と関連する社会的問題についての研究を行い、広く社会貢献・地域連携に資するプロジェクトを構想する。
- ⑤ 上記①～④の研究成果を学部教育に還元する。

二、令和6年度の研究事業成果

本事業の3年目となる令和6年度は、令和4年度・5年度に実施した事業の成果を基盤として、次に掲げる研究事業を行った（該当する上記事業の番号を付した）。

（1）関連文献調査と文献目録作成

建学の精神から「SDGs」を考える理論的研究（①）の基盤となる資料作成を目的として、SDGs関連文献の調査、文献目録の基盤データ作成作業を実施した。また、「SDGs関連文献目録」作成に関する内部検討会（令和6年6月19日）を開催し、「建学の精神」をふまえた調査・研究の方向性等について意見交換を行った。

（2）公開講演会等の開催

令和6年度の公開講演会として、SAP協定（シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー協定）を活用（②③）した渋谷ハチコウ大学（事務局＝渋谷区学びとスポーツ課）との連携による公開講演会「渋谷発！食・農・SDGsが地域を変える！！―都市／農業による街の再生、ビジョンや実例を学ぶ―」（令和7年2月25日）を実施した。渋谷ハチコウ大学との連携によるSDGs関連の公開講演会については、令和7年度以降も引き続き開催していく予定である。

社会貢献・地域連携（③・④）を視野に入れた公開講座として、第3回しぶカフェ「渋谷の農と食が育むまちづくり

―都市から「未来を耕す」試み―」を企画し、本学HP及び國學院大學動画アーカイブにおいてオンデマンド動画で公開した（令和7年2月14日公開。再生件数1015回、令和7年6月11日現在）。本講座の内容については、関連授業等でも参考動画として活用し、学部教育へ還元している。

なお、令和6年度に実施した第3回しぶカフェは、第1回・第2回に続き、渋谷の環境問題に取り組むシブヤサステナブル推進協議会（渋谷区環境基本計画2023）のリーディングプロジェクト。通称「シブサス。事務局＝渋谷区環境政策課」と連携して実施したものであり、「渋谷学」等の成果を基盤として、持続可能な渋谷の未来を考えることを目的に開催したものである。また、今回のテーマは、渋谷における都市農業の展開であり、持続可能な農と食、都市農業の重要性と今後の未来についての対話が繰り広げられた。その内容については、令和7年度刊行予定の『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』に講座記録として掲載予定である。

（3）関連授業の実施

本事業に関連する授業としては、学士課程教育へ還元（⑤）することを目的に、（A）「共存・共生の思想（持続可能な社会を目指して）」（令和6年度前期水曜・300名受講）、（B）「國學院の学問（渋谷学）」（令和6年度後期水曜・156名受講）、（C）「共存・共生の思想（持続可能な社会への取り組み）」（令和6年度後期水曜・218名受講）の3コマのオムニバス講義（共通教育科目）をマネジメントした。（A）では、担当する本学教員

及びゲスト講師による講義の全てにおいて、講義に関わるSDGsのゴール・ターゲットを示し、日本・世界の諸課題とSDGsとの関連性を検討する講義を展開した。（B）では、渋谷区環境政策部、東急株式会社から講師を迎え、渋谷とSDGsについて考える講義を実施している。（C）では、持続可能な社会づくりの教育に関わる認定NPO法人開発教育協会（DEAR）、社会課題を解決するための事業を展開する認定NPO法人サードセクター、シブヤサステナブル推進協議会などから講師を招き、現代社会の諸課題とSDGsとの関係性を様々な視点から捉える講義とともに、それらの課題をどのようにすれば解決できるのかという視点から、毎回5人ずつのグループによるディスカッションを実施した。なお、（A）（B）は、全学的な取り組みと関連させるため、文学部・法学部・経済学部・神道文化学部・人間開発学部・観光まちづくり学部の教員が講師として参画するオムニバス授業となっている。

（4）成果公開

本事業の成果公開（①～⑤）として、令和5年度に実施した第2回「しぶカフェ」の講座記録、オムニバス授業「共存・共生の思想」の講義記録2本、成果論文2本を『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第19号に掲載した。また、本事業で実施した第1回「しぶカフェ」、第2回「しぶカフェ」のYouTube動画（第1回再生件数1571回、第2回再生件数1352回、令和7年6月11日現在）については、関連授業の「共存・共生の思想」等で参考動画として活用し、学部教育に還元している。

令和6年度研究事業成果報告 研究開発推進センター

國學院大學「古典文化学」の創出研究事業

渡 邊 卓

一、研究事業の概要

本事業は、國學院大學が平成28年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB・世界展開型)として選定された「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―研究事業を継承するもので、令和3年度研究事業「神道と日本文化の創造的『古典学』―令和の新しい国学研究―基盤整備事業」の後継事業にあたる。

本事業では、「国学」に由来する本学の「古典」研究をより一層、発展させることを目的とし、中期五カ年計画に基づき、五年間にわたり以下の事業を推進していくものである。

① 国際シンポジウム・ワークショップ等の開催

② 「古事記」・『万葉集』の文献学的研究

③ 「国学」的「古典」研究の再検討

④ 研究成果の教育還元

⑤ 「古典学総合データベース」の構築

⑥ 研究成果の社会発信

①～⑥についての令和6年度の研究事業成果は次の通りである。

二、令和6年度の研究事業成果

①では、天孫降臨神話と深い関わりを有する五神宮会(英彦山神宮、霧島神宮、鹿兒島神宮、鶴戸神宮、宮崎神宮)と共催のもと、公開講演会「霊峰英彦山と地

域社会」を令和6年8月24日(土)に福岡県北九州市で開催した。講演者・タイトルは次の通り。

・高千穂有昭(英彦山神宮禰宜)「英彦山の歴史」

・谷口雅博(文学部教授・「古典文化学」研究代表)「『古事記』『日本書紀』にみる天忍穗耳命」

・吉見俊哉(観光まちづくり学部教授)「精神文化とまちづくり―東京における杜社会堂連携の挑戦―」

当日は神社関係者や一般の来場者、日本思想史、民俗学の研究者など83名が参加した。この成果を踏まえ、令和7年度は五神宮会ならびに霧島市・霧島市教育委員会との共催により鹿兒島県での公開講演会開催を予定している。

また、令和7年2月16日(日)には万葉集研究で知られる国学者・木村正辞を主題にした公開研究会「木村正辞と万葉集研究」を5号館3階5301教室で開催した(ハイブリッド開催)。報告者・タイトルは次の通り。

・大沼宜規(共同研究員・国立国会図書館司書)「木村正辞の活動とその基盤―主として幕末期に着目して―」

・大谷歩(共同研究員・天理大学文学部講師)「木村正辞の万葉学―「三辨證」の形成と『万葉集美夫君志』への展開をめぐって―」

当日は文学・国学の研究者や大学院生など38名が参加した。

②では、昨年度より継続して『古事記』の本文校訂・訓読・注釈および英訳を進めた。定例研究会を4回開催し、「古事記」注釈の検討を中心に教員・研究員による発表・報告を行った。12月23日には木村正辞と本学との関係をテーマに研究会を実施した。研究会の各回の内容は次の通り。

・第1回…令和6年5月29日(水)、オンライン開催(Zoom)

・「古事記注釈」検討…古事記注釈(41)「葦原中国平定(六)」谷口雅博・小野諒巳

・第2回…令和6年7月31日(水)、オンライン開催(Zoom)

・「古事記注釈」検討…古事記注釈(42)「葦原中国平定(七)」谷口雅博・小野諒巳

・第3回…令和6年11月13日(水)、オンライン開催(Zoom)

・「古事記注釈」検討…古事記注釈(43)「天孫降臨(二)」谷口雅博・小野諒巳

・第4回…令和6年12月23日(月)、AMC棟5階会議室06(ハイブリッド開催)

・渡邊卓「皇典講究所・國學院と木村正辞」コメント…大谷歩

また、「古事記学」から継承する古事記研究データベースについて項目の補填・更新を行い、地名データベースの公開件数が100件に達した。

令和6年度のデータベース閲覧件数は神名データベースが88,825件、氏族データベースが2,200件、地名データベースが2,111件(いずれも各データベースのトップページの閲覧件数)。アクセス傾向をみると、日本から3,340件、海外(上位5カ国は中国・アメリカ・韓国・台湾・

香港)からは計1,121件(上位5カ国の合計)の閲覧があった(令和6年4月1日から令和7年3月31日迄の1年間)。

また、創立140周年記念事業である万葉集全注釈『萬葉集正義』の出版事業をマネジメントし、校正・編集作業を行った。令和6年8月に『萬葉集正義』第一、令和7年2月に『萬葉集正義』第二が刊行されている。

③では、『万葉新採百首解』下巻の翻刻テキストを「古典文化学」事業ホームページに公開した。また、①②で前述の通り、木村正辞についての研究会を開催した。さらに本学所蔵「井上氏旧蔵資料」(井上頼圀―頼文―頼寿三代の資料群)も昨年度から継続して整理し、頼圀の資料を中心に簡易目録を完成させた(件数は1,800点)。

④では、本事業に関わる専任・兼任教員の担当科目において研究成果を紹介・活用することで教育に還元した。

⑤では、各データベースの拡充の他、古事記ビュアーの凡例を追加するなど改修を行い、利用者の利便性向上を図った。

⑥では、②の成果である「古事記」注釈・英訳を『國學院大學研究開発推進機構紀要』第17号に掲載し、各種データベースの成果は「古典文化学」事業ホームページで継続的に公開している。また、研究成果の海外発信を企図して、新たに英語版トップページを作成するとともに、英訳古事記をPDFで閲覧・ダウンロードできるページを新規に作成し公開した。令和6年度は「古事記」注釈の第6章までの英訳PDFを公開し、今後

も随時公開を予定している。

令和6年度研究事業成果報告 國學院大學博物館

國學院大學博物館事業

高橋あかね・尾上周平

一、研究事業の概要

当館は、博物館法に準拠した博物館指定施設であり、日本文化の講究に必要な文化財を収集・保存して教育参考に供し、学術的な研究成果を広く社会一般に公開・発信することを目的とする機関である。

（1）展示公開

校史・考古・神道の常設展示と、時宜に合ったテーマによる機動的な特集展示、そして複数年度に亘る研究の成果公開となる特別展・企画展を実施。併せて、図録などの編集・出版も行う。

（2）教育普及・情報発信

オンラインミュージアム等で展示解説を公開するほか、各種イベントを実施。また、デジタル・ミュージアム（DM）運営のハブとなり、外部データベースとの連携を含めて国際的に情報発信する。

（3）環境整備・営繕

博物館における収蔵・展示空間の空気質・温湿度を観測・管理すると共に、総合的有害生物管理（IPM）を実施し、当館の収蔵資料・展示資料や、外部から借用する資料を適切に保護する。

（4）運営支援

展示等に合わせ、SNSを活用して効果的に情報を発信。また、ミュージアムショップにおいて関連書籍・グッズなどを選定・販売し、展示をきっかけとして来館者の学びを深める機会を提供する。

二、令和6年度の研究事業成果

（1）展示公開 ※詳細は表1参照

当館の展示は、機構内機関研究成果公開展示、図書館・学部・大学院連携展示、外部機関連携展示、博物館学・考古学実習関連展示などからなり、教育参考・研究公開・社会貢献を企図する。来館者数は、昨年度比98%の55,803名。

【特別展・企画展】

春の特別列品「恋とさすらいの系譜―源氏物語と平安文学―」（4月20日開幕）、企画展「神輿―つながる人と人―」（MIKOSHI - The Portable Shrine -（6月29日開幕）、特別展「文永の役750年 Part1 海底に眠るモンゴル襲来―水中考古学の世界―」（9月21日開幕）、特別展「文永の役750年 Part2 絵詞に探るモンゴル襲来―『蒙古襲来絵詞』の世界―」（11月30日開幕）、企画展「江戸の本屋さん―板元と庶民文学の隆盛―」（2月22日開幕）の5件。

【特集展示ほか】

「西田長男博士旧蔵資料―資料と研究―」、「教派神道の祭祀と行」、考古学実習特集展示「穂高古墳群 F9号墳―築造・廃絶、そして再利用―」、「伊豆の温泉と修験道」、「科学分析データに見る青銅器―館蔵資料の最新研究―」、「吉田家の人々」ほか（表1参照）の計13件。

この内、特別展「文永の役750年

Part1 海底に眠るモンゴル襲来―水中考古学の世界―」、「文永の役750年 Part2 絵詞に探るモンゴル襲来―『蒙古襲来絵詞』の世界―」は、長崎県松浦市・松浦市教育委員会共催のもと開催した。特集展示「科学分析データに見る青銅器―館蔵資料の最新研究―」はアジア鑄造技術史学会共催のもと、同会東京大会に併せて開催（ニュース前号に関連記事あり）。大学間、および博物館間の研究協定に基づく西南学院大学博物館との相互貸借特集展示も昨年度に引き続き開催している。

（2）教育普及・情報発信

特別展・企画展に合わせて5本の動画を作成し、YouTubeチャンネル「國學院大學博物館 Online Museum」にて公開した。年度末のチャンネル登録者数は、令和5年度末比1,278人増の10,795人。

各種イベントとしては、複合文化施設 Bunkamura主催の「渋谷アート&ウォーク」において、スタンブラリー設置会場として参加。また、本イベントとコラボしている東伊豆町「渋谷温泉」企画と関連して特集展示「伊豆の温泉と修験道」を開催した。

また、企画展「神輿―つながる人と人―」に関連して、各種イベントを企画。ミュージアムトークや、本学研究開発推進機構主催の日本文化を知る講座「祭り・信仰と地域」の他、学生サークルである青葉雅楽会・みずゑ会の協力のもと「神楽舞と雅楽の夕べ」を、若木睦の協力のもと「神輿を担ぐ!」をそれぞれ開催した。

特別展「文永の役750年 Part1 海底に眠るモンゴル襲来―水中考古学の世界―」では、共催の松浦市教育委員会の支援により、VRを用いて、元軍船発掘といった水中考古学の調査を疑似体験する関連イベントを開催。

DMは、学術資料・学術情報のデジタル化と、ジャパンサーチ等での公開を進めている。今期は、新たに「延喜式内社データベース」、「祭祀遺跡データベース」、「所蔵古文書データベース」を公開した。また、既に公開中の「収蔵資料総目録（考古）」「収蔵資料総目録（神道）」に関して、メタデータのダウンロードを可能にできるように整備を行った。また、当館HPトップページのリニューアルを行い、検索・閲覧の利便性の向上に努めた。

（3）環境整備・営繕

温湿度を通年管理した上で、夏・冬の燻蒸と、担当学芸員による常時のIPMを行っている。春夏に文化財害虫などの増加傾向が見られるが、管理エリアへの侵入防止・駆除対策を徹底。博物館会議・企画検討会で観測結果を共有し、都度改善点などを検討してきた。また、主要ガス燻蒸剤の販売終了に備えて、資料保存体制の再検討を進めるため、各種関連研修・シンポジウム等を受講した。

（4）運営支援

SNSを用いた情報発信にも力を入れ、X（旧Twitter）のフォロワーは、令和5年度末比約3,000人増加の約18,000人。ミュージアムショップの運営も順調であり、来館者のニーズに応える運営が好評を博している。

表1 令和6年度 展示公開詳細

展示(会期)		関連事業	
特別展	文永の役 750 年 Part1 海底に眠るモンゴル襲来 —水中考古学の世界— (R6.9/21 ~ 11/24)	オンライン ミュージアム	10/19 池田榮史(本学教授)「特別展「文永の役 750 年 Part1 海底に眠るモンゴル襲来—水中考古学の世界—」を展示解説!!」
		対面	【イベント】 9/21・22・23「海底の元軍船発掘をVRで体験してみよう!」 【ミュージアムトーク】 10/13 池田榮史(本学教授) 【シンポジウム】 11/9「モンゴル人研究者から見たモンゴル襲来」
	文永の役 750 年 Part2 絵詞に探るモンゴル襲来 —『蒙古襲来絵詞』の世界— (R6.11/30 ~ R7.2/16)	オンライン ミュージアム	12/21 池田榮史(本学教授)「特別展「文永の役 750 年 Part2 絵詞に探るモンゴル襲来—『蒙古襲来絵詞』の世界—」を展示解説!!」
		対面	【ミュージアムトーク】 12/7、1/11、2/1 池田榮史(本学教授)
企画展	恋とさすらいの系譜 —源氏物語と平安文学— (R6.4/20 ~ 6/16)	オンライン ミュージアム	5/18 竹内正彦(本学教授)・荒木優也(本学准教授)「春の特別列品「恋とさすらいの系譜—源氏物語と平安文学—」を展示解説!」
	神輿一つながる人と人— MIKOSHI - The Portable Shrine - (R6.6/29 ~ 9/16)	オンライン ミュージアム	7/20 笹生衛(当館館長)・大東敬明(本学教授)「企画展「神輿一つながる人と人—」を展示解説!!」
		対面	【イベント】 7/6「神楽舞と雅楽の夕べ」、9/7「神輿を担ぐ!」 【日本文化を知る講座】 7/20「祭り・信仰と地域」※本学研究開発推進機構主催 【ミュージアムトーク】 9/14 大東敬明(本学教授)
	江戸の本屋さん —板元と庶民文学の隆盛— (R7.2/22 ~ 4/20)	オンライン ミュージアム	3/15 中村正明(本学教授)「企画展「江戸の本屋さん—板元と庶民文学の隆盛—」を展示解説!!」
		対面	【ギャラリートーク】 3/15、4/12 中村正明(本学教授)
特集展示・記念展示	西田長男博士旧蔵資料—資料と研究—(後期)【神道展示室】(R6.3/19 ~ 5/26)		
	西南学院大学博物館 相互貸借展示: 非西欧圏における祈りⅡ エクスポートコレクション【考古展示室】(R6.5/14 ~ 9/24)		
	教派神道の祭祀と行【神道展示室】(R6.5/28 ~ 6/23)		
	考古学実習特集展示: 穂高古墳群 F9号墳—築造・廃絶、そして再利用—【考古展示室】(R6.7/9 ~ 10/6)		
	伊豆の温泉と修験道【考古展示室】(R6.9/6 ~ 11/10)		
	科学分析データに見る青銅器—館蔵資料の最新研究—: アジア鑄造技術史学会東京大会【考古展示室】(R6.9/10 ~ 10/27)		
	吉田家の人々【神道展示室】(R6.9/21 ~ 10/20)		
	西南学院大学博物館 相互貸借展示: 非西欧圏における祈りⅢ フィリピン キリスト教美術コレクション【考古展示室】(R6.9/25 ~ R7.1/26)		
	國學院大學所蔵の祭祀・儀礼の記録—井上頼寿資料・坪井洋文資料—【校史展示室】(R6.10/22 ~ 11/24)		
	熊野へ—参詣と縁起—: 「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録 20 周年記念【神道展示室】(R6.10/22 ~ 12/8)		
	ハニワ —その調査と修理—: 武人埴輪 修復記念【考古展示室】(R6.10/29 ~ R7.1/26)		
	西南学院大学博物館 相互貸借展示: ジュダイカと旧約聖書の植物—安息日と過越祭—【考古展示室】(R7.1/28 ~ 5/25)		
	パレスチナ—その文化と文学—【考古展示室】(R7.3/20 ~)		

表2 令和6年度入館者数

月	人数(名)
4月	3,837
5月	4,057
6月	4,571
7月	4,053
8月	6,395
9月	4,379
10月	6,681
11月	6,465
12月	3,429
1月	3,072
2月	4,088
3月	4,776
合計	55,803



企画展「神輿一つながる人と人」学生サークル協力の関連イベント「神輿を担ぐ!」

事業連携

三嶋大社の東京出開帳
―博物館と共催―

この4月19日から5月6日にかけて、三嶋大社（矢田部盛男宮司）主催、國學院大學博物館・（一社）美しい伊豆創造センター共催の「伊豆の歴史と三嶋大社」展が、KITE（旧東京中央郵便局）地下1階の東京シテイアイにて開催された。このイベントは、三嶋大社の紹介を行うとともに、慶應2（1866）年造営の社殿修理と境内整備、大社旧蔵の「三鱗紋兵庫鎖太刀（伝北條時政奉納）」「沃懸地群馬文兵庫鎖太刀（伝関東菅領上杉氏奉納）」復元奉献をはじめとする「令和の大修理」に伴うもの。

展示の監修は、國學院大學博物館が担当。会場では、Ⅰ）三嶋大社の歴史と歩み（國大博）、Ⅱ）三嶋大社秘蔵の乾板



「伊豆の歴史と三嶋大社」展

写真（日本カメラ博物館）、Ⅲ）伊豆を襲った二つの大地震（美伊豆）、Ⅳ）海進・海退と伊豆の景観（基礎地盤コンサルタンツ）、Ⅴ）列島最古級の遺跡と神津島産黒曜石（沼津市）、Ⅵ）三嶋の神と伊豆のカツオ（國大博）、Ⅶ）源頼朝と三嶋大社（伊豆の国市）のパネル展示が行われたほか、三嶋大社境内遺跡から出土した遺物や、関東大震災・北伊豆地震当時の境内を記録したガラス乾板の複製なども出品され、18日間の会期で約1万4千人の来場があった。

また、5月2日に深澤太郎（國學院大學博物館教授）・遠藤大介（美しい伊豆創造センター専任研究員）、3日に井桵直美（日本カメラ博物館研究員）、4日に吉永博彰（國學院大學博物館客員研究員）・池谷初恵（伊豆の国市学芸員）によるトークイベントを開催。そのほか、三嶋大社による八乙女舞の公演、神職・巫女装束の着装体験、お茶の振る舞い、切り絵の実演なども行われ、外国人観光客を含む多くの来場者から好評を得た。

（深澤太郎・吉永博彰）

調査研究

伝仁徳陵古墳の出土品

―共同研究はじまる―

國學院大學博物館の収蔵品に、明治の考古家として知られる柏木貨一郎旧蔵の古物1箱がある。これは、柏木と懇意であった実業家の益田孝（鈍翁）の手を経たのち、縁あって本学に入ったもの。その中には、包紙に「仁徳帝御陵」、すなわち本邦最大の前方後円墳として知られる5世紀の大府堺市大仙陵古墳（仁徳

天皇陵古墳・百舌鳥耳原中陵）出土とある2包の考古資料が含まれていた。

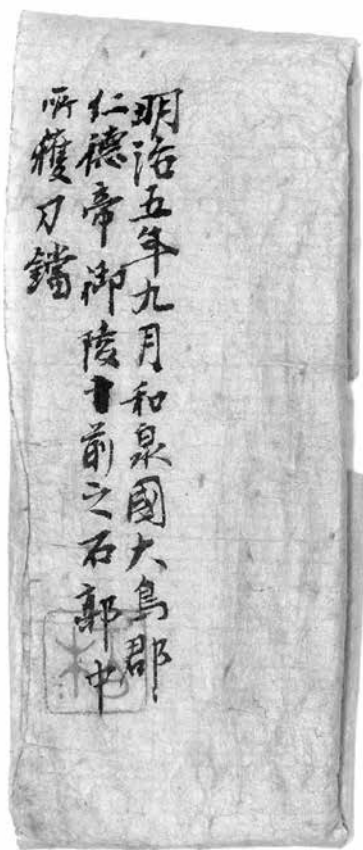
これらは、それぞれ金銅装刀子残欠（写真）と、恐らくは鉄地金銅張甲冑の残片とみられ、明治5（1872）年9月に大仙陵古墳の前方が開口した際、堅穴式石槨に納められていた長持形石棺の周辺から発見されたものである可能性が高い。同時に見つかった副葬品としては、金銅装の横矧板鋌留短甲・眉庇付冑と、20振ほどの鉄刀、そしてガラス製の杯が存在したという。柏木は、埋葬施設や副葬品の絵図を残しており、これらが出土した現場に立ち会っていたのだろう。

本資料群の学術的な位置付けを行うにあたっては、所蔵者である國學院大學

（学術資料センター考古学資料館部門）、大仙陵古墳が所在する大阪府堺市（堺市博物館）、そして金属製文化財の先端的研究を推進している日鉄テクノロジ（株）（文化財調査室）との共同研究契約を4月25日付で締結。6月19日には、堺市博物館において三者合同の記者会見を実施し、出土古墳、柏木貨一郎旧蔵資料、刀子・甲冑片の概要、および考古学・理化学的な研究の中間成果についてマスコミに発表した。

なお、これらの資料は、堺市博物館が企画した特別展「堺のたからもん―金で魅せる・黒を愛でる―」（会期：7月19日～9月7日）にて一般に初公開される。

（内川隆志・深澤太郎）



大仙陵古墳（仁徳天皇陵古墳）出土刀子残欠

彙報

会議

■全体

・令和6年度第5回運営委員会、令和7年2月6日(木)、若木タワー地下1階会議室02

・令和6年度臨時運営委員会、令和7年3月6日(木)、若木タワー地下1階会議室02

・令和7年度第1回運営委員会、令和7年5月8日(木)、若木タワー地下1階会議室02

・令和6年度第6回企画委員会、令和7年3月12日(水)、AMC棟5階会議室06

・令和6年度臨時企画委員会、令和7年3月29日(土)、メール審議

・令和7年度第1回企画委員会、令和7年4月16日(水)、AMC棟5階会議室06

・令和6年度第4回人事委員会、令和7年2月27日(木)、若木タワー4階会議室05

・令和7年度第1回人事委員会、令和7年4月23日(水)、AMC棟5階会議室06

・令和6年度第4回教員等資格審査委員会、令和7年2月27日(木)、若木タワー4階会議室05

・令和7年度第1回教員等資格審査委員会、令和7年4月23日(水)、AMC棟5階会議室06

■日本文化研究所
・令和6年度第6回所員会議、令和7年3月5日(水)、オンライン会議

・令和7年度第1回所員会議、令和7年4月9日(水)、AMC棟5階プロジェクトルーム2

■学術資料センター
・令和6年度第4回学術資料センター

会議、令和7年2月21日(金)、メール審議

■校史・学術資産研究センター

・令和7年度第1回校史・学術資産研究センター会議、令和7年4月22日(火)、オンライン会議

■研究開発推進センター

・令和7年度第1回研究開発推進センター会議、令和7年4月23日(水)、オンライン会議

公開講座

■研究開発推進センター

・第3回「しぶカフェ」(共生社会×渋谷カフェ)「渋谷の農と食が育むまちづくり」都市から「未来を耕す」試み!」、令和7年2月14日(金)、オンライン配信、講師「松嶋範行(シブヤサステナブル推進協議会リダー)」「シブサス」がまく種/育てる意識、古沢広祐(本研究開発推進機構客員教授)「農・食・環境とSDGs」、小倉崇(NPO法人アーバンファーマーズクラブ代表理事・渋谷区ふれあい植物センター園長)「なぜ今、渋谷で農と食なのか?渋谷区ふれあい植物センターの試み」、トークセッション「古沢広祐・松嶋範行・小倉崇、コメント」中尾みなみ(渋谷区環境政策部環境政策課職員)、村早彩(本学後期開講科目「共存・共生の思想」ファシリテーター・本学学生)、高橋亮一(本研究開発推進機構ポスドク研究員)

・令和6年度研究開発推進機構公開研究会「日本文化の形成と宗教―文化進化論の視点からの再検討(試論)」、令和7年2月15日(土)15:00~16:30(ハイブリット開催)、5号館5301教室、講師「笹生衛(本学神道文化学部教授・研究開発推進機構長)、コメント」後藤明(南山大学人類学研究特任研究員)、中田星矢(東京大学国

際高等研究所特任研究員)
・令和6年度研究開発推進機構公開研究会「木村正辞と万葉集研究」、令和7年2月16日(日)14:00~16:00(ハイブリット開催)、5号館5301教室、講師「大沼宜規(本学研究開発推進機構共同研究員・国立国会図書館司書)・大谷歩(本学研究開発推進機構共同研究員・天理大学文学部講師)」公開講演会「渋谷発!食・農・SDGsが地域を変える!!―都市/農業による街の再生、ビジョンや実例を学ぼう」、令和7年2月25日(火)14:00、AMC棟5階会議室06、講師「古沢広祐(本研究開発推進機構客員教授)」

出張

■学術資料センター

・深澤太郎、「館蔵資料の蛍光X線分析」のため、令和7年1月29日(水)、兵庫県尼崎市

・深澤太郎、「古代のカット貢納に係る埴形土器の調査」のため、令和7年3月7日(金)~3月9日(日)、山梨県甲府市、静岡県沼津市

・深澤太郎・井本悠紀、「日本刀の成立に関する理化学的分析ほか」のため、令和7年5月20日(火)~5月22日(木)、奈良県天理市、兵庫県尼崎市、大阪府大阪市、兵庫県神戸市

・深澤太郎・吉永博彰、「三嶋大社関連資料の調査と公開に関する協議」のため、令和7年5月31日(土)、静岡県三島市

■研究開発推進センター
・大東敬明、木村大樹、「皇學館大学神道研究所との合同研究会への出席」のため、令和7年2月27日(木)~2月28日(金)、三重県伊勢市

■國學院大學博物館
・深澤太郎・尾上周平、「特別展「文永の役750年 Part 2」借用資料返却および西南学院大学博物館にお

る相互貸借特集展示撤収」のため、令和7年3月3日(月)~3月7日(金)、長崎県松浦市、熊本県菊池市、福岡県福岡市
・深澤太郎、「特別展「アイヌモシリ」の開催に伴う金田一記念文庫の集荷」のため、令和7年4月23日(水)~4月24日(木)、北海道滝川市

刊行物

■全体

・研究開発推進機構「機構ニュース」通号36(令和7年2月25日発行)

・研究開発推進機構「國學院大學研究開発推進機構紀要」第17号(令和7年3月31日発行)

■日本文化研究所

・日本文化研究所「2023年度国際研究フォーラム」見られることで何が変わるのか?―リズムと宗教文化―報告書(令和7年2月28日発行)

■学術資料センター
・学術資料センター「神の坐す場―景観と心―(令和7年2月28日発行)

・学術資料センター「記録―考古学史いそのかみ―(令和6年9月3日発行)

・校史・学術資産研究センター「校史・学術資産研究」第17号(令和7年3月6日発行)

・校史・学術資産研究センター「校史」第35号(令和7年3月6日発行)

■研究開発推進センター
・研究開発推進センター「研究開発推進センター研究紀要」第19号(令和7年3月10日発行)

■國學院大學博物館
・國學院大學博物館「國學院大學博物館研究報告」第41輯(令和7年2月28日発行)

令和7年度 國學院大學 研究開発推進機構 事業計画及び人事一覧（事業別）

* 研究事業代表者

令和7年7月1日現在

機関	研究事業名	専任教員	兼任教員	客員研究員	ポストドク研究員	研究補助員	客員教授	共同研究員
日本文化研究所	宗教文化研究と学術情報発信の推進	※ 星野靖二 川嶋麗華 藤井修平	飯倉義之 遠藤 潤 黒崎浩行 松本久史 シッケンツ, エリッ	高田 彩	木村悠之介 武井謙悟	郭 立東 西谷瑞希 羽鳥佑亮 牧田小有玲	井上順孝 櫻井義秀 ナカイ, ケイト 林 淳 ハイブズ, ノルマン 山中 弘	天田顕徳 一戸 渉 今井功一 今井信治 大場あや 萩原 稔 小田真裕 小平美香 小高純子 新井正人, ヤニス 齋藤公太 芹口真結子 塚田穂高
	館蔵考古, 民俗, 歴史資料を活用した日本文化形成史の研究	池田榮史 深澤太郎	※ 青木 敬 内川隆志 黒崎浩行 笹生 衛 服部比呂美 山本哲也 伊東俊祐 松本耕作	阿部常樹 鳥越多工摩	青木 龍 大山晋吾	糸数葉菜 吉澤 徹	石井 匠 石川岳彦 井本悠紀 植田 真 尾上周平 加藤元康 菊地大樹 楠恵美子 栗木 崇 惟村忠志	
学術資料センター	神道に関わる学術資産の研究, 展示と神道史研究の推進	大東敬明 木村大樹	※ 加瀬直弥 笹生 衛 鈴木聡子		高 夢雨		伊藤 聡 岡田莊司	塩川哲朗 水谷 類
	神社資料情報の収集と研究資源化事業	大東敬明 宮本誉士 渡邊 卓 比企貴之	※ 加瀬直弥 笹生 衛 藤田大誠 松本久史 荒木優也 手塚雄太	高橋俊之 高見澤美紀		春田華奈	根岸茂夫	遠藤珠紀 金子 拓 高野裕基 松本博明
研究開発推進センター	「カミ学」研究拠点の構築	大東敬明 宮本誉士 新井大祐 齊藤智朗 渡邊 卓 武田幸也 半田竜介 木村大樹 藤井修平	※ 太田直之 加瀬直弥 藤田大誠 松本久史		鈴木健多郎		大貫大樹 河村忠伸 黒岩昭彦 小林威朗 坂井久能 佐藤一伯 高原光啓 戸浪裕之 中野裕三	
	「〈SDGs〉と建学の精神」研究事業	星野靖二 宮本誉士 新井大祐	※ 菊田真司 菅 浩二 藤本頼生 松本久史 手塚雄太		高橋亮一	篠原大輝 山口順平	上山和雄 古沢広祐	今泉宜子 康 成文 高久 舞 西俣先子 冬月 律
	國學院大學「古典文化学」の創出研究事業	渡邊 卓 半田竜介	※ 上野 誠 大石泰夫 谷口雅博 土佐秀里 西岡和彦 松本久史 荒木優也	鶉橋辰成	中山陽介	菅健一郎	辰巳正明	大谷 歩 大沼宜規 城所喬男 和久, イグナシオ 倉住 薫 神宮咲希 鈴木道代
國學院大學博物館	國學院大學博物館事業	池田榮史 大東敬明 深澤太郎 渡邊 卓	※ 内川隆志 笹生 衛	吉永博彰			金子皓彦 小林達雄 相山林繼 福尾正彦 古谷 毅 三橋 健 茂木雅博 柳田康雄	大日方一郎 粕谷 崇 田中 潤 中村 大 中村耕作

学術メディアセンター事務部長	鵜澤英子
学術メディアセンター事務部図書館担当部長	安達 匠
学術メディアセンター事務部研究開発推進機構事務課長	佐野真之
学術メディアセンター事務部	及川 聡
研究開発推進機構事務課	志木志保 鈴木一匡 東海林由光 富永萌香 三塚広椰 藤盛紗暉 三島 隆
國學院大學博物館学芸員	尾上周平 佐々木理良 高橋あかね 網谷哲成（兼務）

往還

学部二年生の夏、発掘調査を終えた僕は、荷物を自転車に括り付けて群馬県の山を下り、埼玉県の実家へ戻った。リュックから発掘道具を抜き出して、代わりに釣り竿や投網、虫網を入れ、成田空港へ向かった。数日後、揺れるプロペラ機が着陸したのは、陸路では行けない世界最大の町、ペルーのイキトスだ。アマゾン熱帯雨林に到着である。ここからさらに船で川をさかのぼってジャングルの奥地へ向かう。ここは南半球に位置する赤道地域で



ある。生き物の色がとにかく濃い。魚は食欲が失せるほどにカラフルで、うろこ一枚一枚までが毒々しいほどに鮮やかなものが多い。ジャングルの緑はむせ返るほど深い。高木が少ないために空が広い。真っ青な空にはいつもシュークリームのような形の雲がたくさん浮いていて、たまに雷とシャワーのような雨を降らす。

以下に述べるのは、そんなアマゾンの川原で過ごしたとある一日の話である。

早朝、目覚めとともに殺虫剤を全身にかける。蚊がたくさんいるのだ。全身かゆくなるのも、マラリアになるのもいやである。そして熱がこもったテントから

抜け出す。外気は涼しく、やや火照った体に心地よい。のどが渇いている。そこで川に投げ込んである網を手繰り寄せる。ビールが入っているのだ。冷やしてあるというよりは、温まらないようにしている。川の水温と同じぬるいビールであるが、ジャングルで飲めばひときわうまい。空き缶が並びだせば、白んでいた空からしだいに星が消えてゆき、代わりに空が赤紫になる。大きな木のシルエツトが朝空を切り抜いていて、とつてもいい気持ちである。酔いが回ってくる頃にはもう強い日差しがテントの湿り気を飛ばしてくれている。

岸辺は長石と石英の砂粒で真っ白であ

僕の夏休み

吉澤

る。赤道の日の光を反射してまぶしい。踏みしめるたびにきゅつきゅつと小気味のいい音が鳴る。鳴き砂だ。川は有色透明の透き通った茶色い水をたたえている。アマゾン川という、泥で濁った水を想起する人も多いだろうが、実際はちよつと違う。大量の枯葉や枯れ枝からタンニンが溶け出して、紅茶のように水を染め上げているのだ。これをブラックウォーターという。色とりどりの魚たちも、ブラックウォーターの中でみると一味違う。あれほど鮮やかだった魚たちが、紅茶色の水によって見えにくくなるのだ。メタリックな色も、水面付近ではキラキラした反射に紛れてしまう。もし

徹

かしたら、カラフルな魚たちの色は、ブラックウォーターの中ではむしろ保護色になっているのかもしれない。そんな魚たちを、投網でせつせと採取して回る。尻尾からヒモが数十センチも伸びたナマズ、ブーメランの形の魚、魚肉ソーセージによく似た魚、一日魚を採っていてもあまりの多様さにおよそ飽きるといふことがない。昼食を忘れてしまう。鶏肉を餌に釣りをすればピラニアやひげが体より長いナマズがかかる。ピラニアはあまりおいしくないのでもリリースだ。そうこうしているうちにもう夕方だ。ジャングルの夕焼けは朝日にも劣らずさらに壮絶である。真っ赤に焦げた空と、それを映すアマゾン川によって、見渡す限り世界が真っ赤に染まる。限りなく原色に近い赤だ。

一日の終わりは案内をしてくれた人たちや漁師さんと一緒に川のほとりでご飯を食べる。忘れられないのはナマズを鉈で輪切りにして揚げた豪快な料理である。白いふわっとした身に、ビールが進む。果物も素晴らしい。黄色い楕円のフルーツがお気に入り。で、端を切り落として中をぐちゃぐちゃにかき混ぜて、少し飲んだ後そこにラム酒を加えてさらにかき混ぜる。甘酸っぱい果肉とラムが舌にピリツときてのどが爽やかだ。夕食の後は、もちろん宴会だ。この地域特有のモノなのだろうか、ちよつとした作法がある。まず皆で一つの環を作って座る。つぎにグラスと瓶ビールが用意される。そして、それを順番に回し飲みにするのだ。一つの環と一セットのビール、そして一つの話と一話ながら、歓談する。生い立ち、好きなこと、嫌いなこと、あるいはちよつとした秘密を打ち明け合っていく。酔いが回

る頃には、気温も落ちて心地よい。こうして各自テントに戻る。

ところで、僕は熱帯魚と同じくらいには、星もまた好きである。したがって、テントで休憩した後は例によって全身に殺虫剤をかけて、夜が深まるのを待つ。テントの周囲数十キロの範囲には、少なくとも大きな町はないのだろう。とにかく暗い。夜空を見ても思ったのは「目」である。星の粒がたつていて、無数の目からのぞき込まれているように錯覚するのだ。星の明暗は空全体に奥行きを与えていて、宇宙全体が立体物に見える。銀河のバルジ部分とそこから延びる巨大な腕、それを隠す暗黒星雲、これが「ダーク・エミュー」か、と思う。白砂に寝そべって天の川を見ていると、一瞬上下がわからなくなることがある。地球側に落ちそうになるような心地がして、びくっとして砂をつかむ。そして背中に地球の引力を感じて安心する。胡坐をかに座ると、遠く地平線の向こう、天の川の下端が雲の形に切り取られていることに気づく。雲は時々雷を落とす。雷鳴はとどかない。真っ暗な空に雷が少しまぶしく、稲妻の形が残像として残る。また、稲妻で雲全体が照らされることで、雲の形をはっきりと捉えることができる。

銀河と遠雷に向かって一眼レフを据え、シャッターを開ける。すると三脚の後ろに極めてうつすらと影が落ちていることに気が付く。周囲に明かりはない。つまり、三脚の後ろに落ちた影は星々の光が作る影ということになる。太陽と月の他に、天の川も地球に影を作るのだ。そのことを身をもって知った時の気持ちには言葉では表現できない。今でも時々思い出す、夏休みの思い出だ。

（研究開発推進機構研究補助員）